No.2-2

【エッセイ】

私の家族の一人は、老人ホームでお世話になっている。祖母は幼い頃、私の面倒をよく見てくれていた。聡明でしっかりとした性格の人だった。だが、年を追うごとに身体が動かなくなっていった。そして、物忘れも激しくなっていった。もう、孫の顔も覚えていない。この間、再会したときは私のことを誰だか分かっていないようで。受け答えも時間がひどくかかり、危うさが常に伴う。別れ際の祖母の背は、私の記憶の中より随分小さくなっていた。

祖母を見ていると、時に私は自分でも上手く説明出来ない感情に包まれる。　息苦しくなり。どうしても冷静ではいられなくなる。まるで出口のない迷路に入りこんでしまったよう。福祉という仕事は本当大変だ。　介護や介助一つとっても、家族だけではどうにもならない。あるいは、家族だからこそどうにもならないことが確かにある。　食事は好き嫌いが多くて食べられないものだらけ。風呂やトイレも一人で入ることができない。情緒が不安定でいきなり怒鳴りだす。　家にいたときの祖母は、とても息苦しそうで。私達家族もどんどん疲弊していった。多分、祖母は身内に対しては色々とプライドが働いてしまったという部分もあったと思う。

逆に、介護施設に入ってからは随分と落ち着いてきた。　世話をしてくれる職員の方と楽しそうに話をしている祖母は、のびのびとしていて無理に肩肘を張ることなく毎日を過ごしている。　たとえ、家族の顔を忘れていたとしても。今の祖母の笑顔を、私は貴重なものだと思う。

福祉の基本は困っている人を助けること。ただ、相手を助けるために、何もかも自分で抱えこもうとするとどうしても無理が出てきてしまうのも現実だ。どちらかが犠牲を強いられる関係は、結局のところ両方ともを駄目にしてしまう。

そんな時は、人の手を借りることを恥じるべきではない。自分が出来ること、自分の出来ないことを良く考え。どんな助けを、どこで得ることが出来るのか。どうすることがお互いに幸せになれるかを模索するのが、本当に大切なことだろう。